

## 第5章

日本人居留民一岡崎兼吉



はじめに

「指導する学生は 34 人、そのすべてが中国人の留学生になった研究室がある。早稲田大学大学院の北九州キャンパス。ここで画像処理などに使う大規模集積回路の開発に取り組む後藤敏教授の研究室だ」。これは、恩師から知らされた『読売新聞』朝刊（2010 年 5 月 12 日）の 1 面のトップ記事「メガチャイナ 変わる日中①」の冒頭である。中国人留学生の歴史を通して中日関係を調べている筆者は、これほど中国人留学生を熱心に指導している後藤教授の姿に大きな感動を得た。教育交流におけるこのような密接な日中関係は、いったいつからできたのだろうか。

こうしたことに思いを巡らせる時、ある歴史的映像が思い浮かぶ。1972 年 9 月に北京で行われた中日国交正常化のための首脳会談である。交渉の場には流暢な日本語を話す中国人通訳がいた。彼らは日本語を巧みに操り多くの人を驚かせた。冷戦が構造化するなかで生まれた新中国は、1949 年の建国当初からソ連一辺倒で、ロシア語教育に力を入れていた。しかし、かつて侵略国だった日本の言葉は軽視され、日本語が話せるだけで売国奴と見なされ冷遇される時代が長く続いた。中国人通訳たちはどこで日本語をマスターしたのであろうか。

建国当初の日本語教育は、不正常的な中日関係によって制限されたが、例外として「研究や教育にたずさわる専門家を育てること」を「おもな任務」として日本語学科を設置した大学もあった。それが北京大学である。募集した学生数は 1949 年に 7 名、以降、多い年は 35 名、少ない年は 1 名といった具合に細々と続いていた<sup>1)</sup>。その学生の入学前の経歴を一瞥すると、主に二つのルートがあることがわかる。一つは日本にいた華僑の子弟で、新中国の成立をきっかけに母国に帰って進学したルートである。これら日本華僑子弟は高校までほとんど日本で教育を受けたので、日本語を流暢に話すことができたのは当然である。中日国交正常化交渉のとき、周恩来の通訳を務めた林麗韞は<sup>2)</sup>、その代表的人物であった。

しかし、こうした華僑の子弟は割合としては少ない。後の中日友好を担った多くの人々は、中国全土から大学入試や選抜を受けて採用された。林麗韞と同じく周恩来の通訳を務めた王効賢<sup>3)</sup>、外務大臣を務めたこともある唐家璇<sup>4)</sup>などがそうである。彼らの中には旧満州など日本統治下で過ごしたことがあり、身につけた日本語を生かすために進学した人々もすくなくなかった。

このようにして集めた優秀な学生を養成した教師には、徐祖正、魏敷訓、陳信徳、劉振瀛、黄啓助、孫興凡、張京先、孫宗光といった新中国の日本語学界を代表する中国語学者が名を連ねた。ただ、日本語を学び続けている学徒の一人である筆者自身の経験からいえば、一つの言語をその国の人間と同じように操ることができるようになるためには、その国の人間と常に接触しなければ難しい。果たしてこれらの学生は誰からネイティブな日本語を学んだのだろうか。こうした素朴な疑問が本研究の着想に至った経緯である。

北京大学には日本人の日本語教師がいた。彼らはいつか国交が回復する日を信じ、日の当たらない場所で地道な教育を行っていた。かれら日本人教師はどのように生き、何を感じ、さらに将来の日中関係をどのように見据えていたのだろうか。彼らの存在と活動は、いわば「秘められた日中交流史の 1 コマ」である。「戦後の日中史に残された、特異な足跡が跡形もなく消えていく」ことのないようにするためにも、彼らに光をあてて研究する必要がある<sup>5)</sup>。

本章では、そのような日本人教師を代表する人物として、岡崎兼吉を取り上げる。

岡崎は 1953 年、つまり日中国交回復の 18 年も前から北京大学で 32 年あまり日本語を教えていた。1999 年 8 月 31 日に北京で亡くなったが、このニュースは、日本の新聞はもちろん、中国の『人民日報』も大きく報じた。

岡崎兼吉についてこれまで先行研究がない。本研究では、残された本人の日記や手帳など生の声が聞こえる資料、教え子の回顧文、さらに岡崎と同年に北京大学「日語科」の教師となった孫宗光や教え子へのインタビュー結果を駆使し、岡崎の経歴や北京大学での教育活動を明らかにする。

## 1. 経歴

### (1) 渡満前後

岡崎の自筆の履歴書によると、岡崎は 1909 年佐賀県唐津に生まれた。地元の尋常小学校を経て 1927 年 3 月に旧制唐津中学校を卒業した。17 歳の岡崎は、旧制の高松高等商業学校や和歌山高等商業学校を受験したが合格せず、同年 9 月に同窓数名と共に上京し、東京第一外語予備校に通った<sup>6)</sup>。1929 年 5 月に早稲田大学の読書会に参加した。当時の読書会は共産主義学習や活動のための組織であった。この読書会での学習は、後の岡崎のプロレタリア思想の形成に大きな影響を与えたと考えられる。

1930 年 4 月、20 歳の岡崎は早稲田大学文学部文学科国文学専攻に合格した。以降、読書会の学外活動にも頻繁に参加するようになった。この学外活動の参加で 2 回治安維持法違反者として検挙され、計 3 ヶ月の拘留を受けた。とりわけ第 2 回の拘留は同大学退学処分の原因となり、1932 年 12 月に第三学年であった岡崎は中途退学することになった。中退後の岡崎は就職に恵まれなかったが、プロレタリアへの信奉は揺がなかった。1933 年に当時岩崎昶が委員長であった「日本プロレタリア映画同盟」に加入し、翌 1934 年同同盟解散後は雑誌『映画創造』の同人となり、1939 年頃まで活動した。こうした社会活動によって 1940 年 5 月までの数年間、治安維持法違反者の監督機関に当たる東京保護観察所の「保護観察」を受けた。

1935 年 4 月、25 歳の岡崎は東京都にある政界往来社編集部就職し<sup>7)</sup>。1940 年 3 月、30 歳の岡崎は 5 年間の雑誌編集生活を終えて理研科学映画株式会社庶務課へ転勤した。日本プロレタリア映画同盟時代の思いや経験が生かされるようになった。同年の理研科学映画は下村兼史監督のもとで作成した科学映画『或日の干潟』が文部大臣賞を受賞し、皇紀 2600 年奉祝芸能祭文化映画コンクール首席に輝いた。その背景には岡崎のようなスタッフの支えもかけがえのないものであっただろう。

1942 年 10 月、32 歳の岡崎は新たなステップを求めて「満州国」に渡った。都の新京（現、長春市）にある国策映画会社満州映画協会啓民映画部庶務課に勤務し、後に係主任に昇進した。1944 年頃には構成員にもなり、文化映画の脚本や演出にも加わった。満州映画協会は「満州国」の崩壊によって 1945 年 9 月に中国共産党の組織である「東北電影工作者聯盟」に委譲され、10 月 1 日に中国人民の手により「東北電影公司」として生まれ変わった。旧満映で働いていた多くの日本人スタッフも同会社の設立に尽力し、岡崎はニュース・記録映画の企画・構成部門に勤務した。1946 年 5 月、内戦によって東北電影公司是合江省興山市（現、黒龍江省鶴崗市）へ移転し、岡崎ら中核をなす人々はそれに従った。1946

年 10 月 1 日、東北電影公司是東北電影製片廠と改組された。ニュースなどを細々と製作していたに過ぎなかったために縮小を余儀なくされたので、岡崎は多くの日本人技術者や職員などと共に東北電影製片廠を離れ、「沙河子碼頭達連河三姓煤砒」という炭鉱で働くようになった。1948 年 10 月、岡崎は友人の斡旋により齊齊哈爾市日本僑民協会に移り、同協会の民生医院の「協理員」となった。

## (2) 北京大学への赴任

映画制作に携わっていた岡崎が教育の世界へ足を踏み入れたのは、1949 年末のことであった。39 歳の岡崎は日本僑民協会を離れ、人民鉄路に属する牡丹江日籍小学校の教師となった。1950 年末、東北地方にあった鉄道部管下の全日本人スタッフが「関内移動」となり、岡崎も北京鉄路局附属の第二鉄路小学校へ転勤し、日籍班の教師となった。1952 年 2 月、岡崎は鉄道部に抜擢されて河南省鄭州で設立したばかりの「鉄道部日籍員工子弟中学校」に派遣され、国語教師となった<sup>8)</sup>。こうした人事異動から岡崎は当局に信頼されていたことがうかがえる。実際、牡丹江日籍小学校教師となった直後の 1950 年 1 月、岡崎は「鉄路工会」と「新民主主義連盟」（鉄道部管下の日本人の学習組織）に加入した。政治立場を重視する建国当初の中国にとって、岡崎の姿勢は非常に好意的に受け取られたと思う。

1953 年 3 月、在華日本人居留民の集団帰国が始まった<sup>9)</sup>。岡崎も帰国の手続きをとったが、3 月 12 日愛妻の病死にあい、帰国を延期した。悲しみに沈む岡崎に鉄道部管下の日本人工会（組合）本部から、鉄道部と全国総工会（全国労働者組合）の推薦で北京大学東方語言系日語科の日本語教師にならないかとの相談があった。岡崎は上京を決めた。愛妻の死が岡崎の足を留めた直接の原因であったが、彼に新中国に残り中国人に日本語を教えることを決意させたのは、戦前中国を侵略した日本の生々しい残像、対して日本人居留民の送還を支援する中国の姿であったと考えられる<sup>10)</sup>。

1953 年 5 月 3 日、43 歳の岡崎は北京大学東方語言系日語科に着任した。同月、大学の「教育工会」に加入した。着任当初の待遇は「講師」で、1958 年以降は「専家」に変更された。ちなみに、北京大学の日語科は新中国最初の日本語教育機関である<sup>11)</sup>。建国当初は今西春秋という戦前から残っていた日本人教師がいたが、1951 年 1 月に反革命罪にて逮捕されたため、日本人教師が不在となった<sup>12)</sup>。政治的に信用できる日本人知識者を見出すのは困難であった当時において、岡崎の就任は北京大学の日語科にとって焦眉の急を解いたと言っても過言ではないであろう。

北京大学での教師生活が 13 年を過ぎた 1966 年 6 月 2 日、同大学哲学科教師聶元梓により革命的大字報が張り出され、文化大革命が本格的に始まった。当時北京大学にいた科学技術者伏見和郎の回顧によると<sup>13)</sup>、文革の震源地となった北京大学は突然「休校状態に入ってしまう、外国人教師は毎日毎日をもてあましている人もいたようである」。夏休みが終わっても開講せず、「武闘」という武力による派閥争いの嵐はますます勢いを増した。良心的で有能な人であっても大きな流れに抗いがたい当時の状況にあって、北京在住日本人の多くは文革をたたえた。1966 年 9 月 19 日の日付で外国人「専家」の宿舎でもある友誼賓館の食堂に張り出された署名付きの北京在住日本人有志の「宣言」という壁新聞はその象徴的なものである。18 名の署名には当時北京大学日本語教師 3 名中 2 名の名があっ

たが、岡崎の名はなく、文革賛美者と一線を画したと思われる。一方、1967年から1968年にかけて岡崎は自願により毛沢東選集（1-4巻）日本語版の改訂作業に参加した。文革の渦中にあった日本人としての一種の自衛の策であり、閉塞状態が続く北京大学で何もせず過ごすより翻訳という理性的作業を通じて現実の中国を日本に知らせたかったのかもしれない。1969年、文革は最高潮に達した。同じく日本語を教えていた陳信徳の妻平林美鶴の回顧によると、「7月ごろから、いわゆる『問題がある』とされている人々に対する『処理』が発表されはじめた。つまり判決である。…大部分の人は農村などに労働に」出された<sup>14)</sup>。

こうした状態の中、1969年12月、岡崎は文革中の北京大学当局の通告を受け、16年間の教師生活に終わりを告げ帰国した。60歳のことである。

### (3)再び北京大学へ

27年ぶりに日本の土を踏んだ岡崎の前には、生活問題が立ちはだかった。当時、中国で受けた給料の三分の一程度は日本円に交換できるが、大部分の中国元は両替も日本に持って帰ることもできない決まりがあった<sup>15)</sup>。時の日本社会では敵対的で社会主義国である中国への不信や反感がまだまだ根強く、岡崎のように敵対国に貢献した異質な帰国者にとって就職先をみつけることは容易ではなかった。結局半年以上も職に就くことはできず、1970年9月にやっと愛知大学名古屋校舎図書館臨時嘱託の職を得た。

その後、日中関係回復の兆しが見えてきて、1970年12月に日中国交回復促進議員連盟が発足した。1971年3月に名古屋で世界卓球選手権大会が開催され、10月中国は国連に復帰した。さらに1972年2月のニクソン米大統領の訪中によって、日中関係が急速に改善され、9月に日中共同声明が調印された。こうした流れに呼応するように日中友好（正統）愛知県本部では活動者会議を開き、日中友好活動の普及を担う工作隊を立ち上げた。岡崎はこの工作隊の隊長という大役を託された。日中国交正常化によって高まった中国への関心に応えるため、婦人研究所の要請を受けて婦人研修会「お隣の中国を知ろう」第二期講義「中国問題講座」を担当するようになった。また、三省堂第一出版部の依頼により、『新華字典』（81-120頁）の翻訳作業にも携わった<sup>16)</sup>。

中国の社会秩序は中日関係の回復と歩調をあわせるように修復されていった。1971年9月の林彪失脚によってそのスピードは加速した。「周恩来総理の政策がよく行われるようになったせいであろう。あらゆる部門の秩序が回復して、学生たちは勉強に励むようになり、工場の生産も回復した」と平林が回顧している<sup>17)</sup>。こうした流れの中、北京大学革命委員会副主任、周培源が周恩来から基礎研究強化の依頼を受けて1972年10月6日に『光明日報』で基礎研究の原則論を発表した<sup>18)</sup>。日本を含む資本主義国家の技術的文献の翻訳が許され、翻訳人材の養成が重視されるようになった。しかし当時の北京大学日語科は文革によって日本語教師、とりわけ日本人教師が不足していた<sup>19)</sup>。大学当局は新しい情勢に対応できるように人事を急いだ。

1972年12月、岡崎のもとに当時の北京大学学長王連龍から親書が届いた<sup>20)</sup>。日本語教師としての招請である。招聘を受けとった岡崎はいかなる心情であったか知るよしもないが、それに応じることを即決したことから、大きな喜びをもって受け取ったに違いない。文革によって帰国を余儀なくされたにもかかわらず、その心は常に中国にあったのかもしれない。

れない。

1973年1月12日、岡崎は愛知大学の嘱託を辞した。親族や友人に別れを告げ、4月24日に羽田から飛び立った<sup>21)</sup>。

岡崎の就任を北京大学は歓迎会を設けて温かく迎えた。その様子について岡崎は次のように記している<sup>22)</sup>。

4月29日(日)みんなはメーデー休みのふりかえ出勤。午前中、北京安着の挨拶状書きと日本語科歓迎会の挨拶準備。午後2時、日本語科の歓迎会に出る。劉信瀛、張京先、李智美など先日会えなかった先生たちにも会い、いよいよ歓迎会場へ、解放軍を主力とする学生の前へ。卞立強同志、張殿英同志(東語系党支部書記、系代表)、徐昌華(日本語科教師代表)、学生代表、児玉先生などの挨拶をうけ、自ら挨拶に立つ。激動。つづいて、日本語科の教育・学習計画案の報告と討論に参加。夜、專家晩会(友誼賓館)、各先生に対面歓談。午後6時より臨湖軒で北京大学首脳の各同志に迎えられ、会食。

岡崎が再度渡中したのは63歳の時であり、その後78歳まで北京大学の教壇に立った。教壇を離れても北京を離れることはなく、亡くなる89歳まで友誼賓館の自室で日本語を教えながら晩年を送った。

## 2. 北京大学での教育活動

### (1) 教師としての岡崎

さて、岡崎はどのような教師であったのだろうか。ここでは、少々長文ではあるが、早期の卒業生江東が人民日報で発表した回顧文を紹介する<sup>23)</sup>。

1953年春、岡崎先生は新中国の海外の専門家第一陣として招かれて北京大学にやって来た。当時、先生は中国の教師と同様、数十元の給料しかもらっていなかったが、毅然として東方言語文化学部の教壇に立った。私は今でもよく覚えている。その年の冬、私たち十数名の学生が冷え切った教室で座しているところに、岡崎先生が青い綿入れを着て教材の束を小脇に抱えて入ってきた。一見、先生は中国の教師と何も変わらない。ただ、背が低くて動きが機敏、眉がくっきり黒くて太かった。先生は教材を演台にきちんと揃え、深々と礼をして、「おはようございます」と言った。そしてすぐに教材を広げ、はつらつとして、授業を始めた。教室の寒さなどまったく意に介さないようだった。

岡崎先生の学問に対する態度は大変謹厳であった。中日間にまだ国交が無かった五、六〇年代、日本語教材は極端に欠乏していた。そこで、先生は夜に日を継いで日本語教材を編集し、しまいには中国地図や日本地図まで自分で描いた。先生は何十冊もの、丁寧に書かれた教材と教学メモを残している。今日、北京大学日本語研究室の若い教師が教学上、論争になった時は岡崎先生の編集した教材をめくり、その中に答えを求めるとのである。

岡崎先生の教学態度は非常に真面目であった。厳しい父親のように学生を指導した。授業では、学生に対して誤りを一つ一つ率直に指摘した。…返ってきたばかりの宿題ノートを開くと、そこにはびっしりと小さな赤い文字が並んでいたもので、私の顔はぱっと

真っ赤になった。だが、周囲の学生の宿題ノートを見回してみると、やはり赤ペンで直されて「真っ赤」だった。それで私の気持ちが静まってきたので、赤ペンの字をたどってじっくり読んだ。その赤い字は鋭利な刃物のようで、一つ一つ私の語彙・文法の誤りを切り出し、句読点一つも疎かにはしていなかった。再び顔をあげて岡崎先生の顔を見ると、先生の目が疲れて充血しているのがわかった。私たちの十数冊の宿題のために岡崎先生がまた不眠の一夜を過ごしたのだということは、想像に難くなかった。その瞬間、私は感激で胸が一杯になった。

……

1998年5月4日、…歴代の卒業生が母校の百周年を祝うために北京大学にやってきたのだ。百名以上の日本語専攻の卒業生が、外国語学部棟前の草地に集まった。…この時、私は、岡崎先生が車椅子に座ってゆっくりと私たちの方に向かってやって来るのに、はっと気が付いた。先生の濃い眉の下には昔のままのやさしい微笑が見えた。ただ、額と目じりのしわが深くなって、風雨に耐えた石像のようだった。私たちはすぐに車椅子の方に押し寄せ、争って岡崎先生と握手した。それから、岡崎先生を真中にお連れして、最後の貴重な写真を残したのである。

1999年5月3日は、岡崎先生の九十歳の誕生日だった。4月から、国内外の先生の教え子が連絡を取り合い、誕生祝いの準備を始めた。4月30日、私は岡崎先生に電話をした。「東方言語文化学部の教師生徒が先生のことを慕って、お祝いしようと考えました。みんなで寿の文字を九十個書き、ケーキを予約しました。周総理が最も好んで食べた、獅子頭〔肉団子の料理〕も食べていただこうと思っています」。電話から岡崎先生の震える声が聞こえてきた。「あーありがとうー皆さん。…」

しかし、4月31日、あろうことか、岡崎先生永眠の訃報が届いた。お祝いの宴は、追悼会になってしまった。岡崎先生が教えた十数名の歴代の卒業生が、誰が言うともなしに輪になって座った。中央に座る人はいなかったけれども、私には岡崎先生の小さくて精悍な姿が見え、厳しく優しく諭す声が聞こえ、濃い眉の下のやさしい微笑みが見えるような気がした。その場にいた者は皆で、岡崎先生の高尚な人柄や倦まずたゆまずの教学精神について話したり、先生が学生たちに残した数々について語ったりした……私は空席をながめ、そっとつぶやいた。「岡崎先生、あなたは北京大学の学生の心の中にずっと生き続けるのです」。

岡崎の厳しい教学態度について、岡崎より一年遅く、翌1954年に日語科の教師になった孫宗光へのインタビューからも伺えた。また、1954年と1955年に入学した李宗恵と顧海根も口をそろえて岡崎の教学への厳しさと自分たちに対する優しさを熱く語った。とくに李は中国ではまだ日本語辞書を出版していなかった1957年に岡崎が私費で日本から20冊『明解国語辞典』（改訂版、昭和32年）を購入し、李らクラス全員に一冊づつ贈呈したことを語った。李は今もこの辞書を大事にしている<sup>24)</sup>。

こうした岡崎の情熱に対し学生たちは信頼と親しみを寄せた。岡崎がさまざまな場面で行った「挨拶」で紹介されたエピソードからもそのことが分かる。「私は北大に赴任したとき、…積極的に人懐っこい学生に取り囲まれながら、のびのびと仕事をする事が出来ました<sup>25)</sup>」、「私の下手な授業をまじめにーときには大仰に受けてくれ、よく勉強してく

れた。また課外には、私の子供の遊び相手やお守り役をしてくれたりした。あるクラスの班長などは『先生、今の給料でやってゆけますか』と心配してくれ、私を面食らわせた<sup>26)</sup>。

## (2)教材づくり

岡崎の北京大学での重要な役目の一つは、教材づくりであった。これが若手教師への指導、授業の担当とあわせて、大学から与えられた3つの任務だと岡崎は認識していた<sup>27)</sup>。ここでは、1973年の三年生の授業「閲読」（講読）の教材づくりを事例として見ておく。

当時、文革中の北京大学は教育改革を行うため、日語科を五年制から三年制に短縮した。また、全国大学入試統一試験が文革によって廃止されたため、3年制の新入生は労働者や農民および解放軍の推薦によって無試験で入学した「労農兵學員」であった。いわゆる「開門弁学」である。1971年9月、日語科は最初の「労農兵學員」14名を受け入れた。内訳は中学校を卒業して「上山下郷」を経験した「知識青年」10名と学校教育を受けてこなかった年輩の幹部4名であった<sup>28)</sup>。五年間のカリキュラムを三年間に短縮し、さらに高校までの基礎知識を身につけていない「労農兵學員」のため、日語科は新たな教材開発に忙殺された。岡崎が担当する「閲読」教材はその一つであった。「閲読」は三年生の教育課程への配当時間数をもっとも多く<sup>29)</sup>、これから強化していこうとしていた科目であった<sup>30)</sup>。

教材づくりは題材の選定から始まった。題材は「主に文藝作品で、対話式の作品と脚本を多く選ぶ。日本の現実を反映する作品をたくさん選び、少量なブルジョア的文芸作品を選んでもよい」と規定された<sup>31)</sup>。これを踏まえて、岡崎は教師劉と打ち合わせ、題材選定により具体的な基準方針を定めた。「二ヵ月半の授業」しかないので、まず重視されたのは「日本人のふだんの会話」であり、「社交的でないもの」、「デリケートな語感をもっているもの」であった。「題材では現代の日常生活と密着したもの、ストーリーのあるもの」で、「日本人の発想法のある文章」や「なるだけ句型、熟語、『詞組』（単語、筆者註）の多いもの」と記された。また、『時文』と衝突しないものであることも重要視された。「現代の日常生活と密接」なもので、「日本人の発想法のある文章」を求めつつ、「時文」、つまり時事の文脈と衝突してはいけないという時代の特殊性が反映された。結局、脚本の「沖縄の朝（初めの部分）2000字」と「波濤（社長など反面人物の場面）2000字」、小説の「土豆村での一夜（二）3000字」と「遙拝隊長（初めの方4000字、上、下に分ける）」が取り上げられ<sup>32)</sup>、議論のすえ、漸く金曜日「11時頃までかかって7課をきめ」た<sup>33)</sup>。順番としては「土豆村の一夜」、「波濤」、「沖縄の朝」、「灰色の月」、「藤野先生」、「遙拝隊長」、「北京の旅」とされた<sup>34)</sup>。選ばれた教材の性格は、反戦あるいは中日両国の交流を展望できるような物語が多いことがいえる<sup>35)</sup>。

選定の際に岡崎は多くの意見を述べた<sup>36)</sup>。たとえば、「沖縄の朝」の選定について岡崎は「可」と判断したが、「ことばのふくみ背後まで考えると、あまりやさしくはない」、「沖縄の人民は特殊の読み方をするものが多く、わたしにもわからないものがある」、「朗読録音をするような場合は先生たちを多数動員してやらないと効果がない—それも考慮しておく必要がある」と扱いにくい点を指摘した。「波濤」についても「可」としたが、「ことばのやりとり、それぞれの背景、会話のきりかえなどかなり難しい」、「時代背景はもちろん、軍事産業と防衛庁—政府との関係、「新日本造船」「川崎重工業」の名で想定されているモデル「ゴザの暴動」などについて一応説明してかかる必要がある。身分関係、

職業がらなどを反映した表現（とくに慣用的な表現）には一定の力をいれて説明する必要がある」と具体的な取り扱い方法に言及した。また、「土豆村での一夜」については「今考えられている候補作品の中では前にもって来た方がいい」、「むしろ『中訳日』の技巧を教える材料として活用できそう。とくに『中文』をそのまま訳すると、くどくなり、不自然になる点の処理など」、「一部の多少ふるくさい表現、題材にそぐわない表現、前後の調和のとれない表現などは、なおすか、説明を加えた方がいい」と文章の並び順や使用上の工夫を提案した。

作品が決まった 18 日の午後、岡崎は直ちに「土豆村での一夜」について添削に取りかかった。まずは「加筆」をして、次は「句型、熟語解説の査閲」を行った<sup>37)</sup>。「久しぶりのこの種の仕事でつかえてばかりいて進まない」、「5 月 19 日（土）5 時半頃起き出し、6 時半頃から昨日の続きの添削をはじめて 10 時すぎに漸く終わる。さっそく教研室に届け」た<sup>38)</sup>。続いての四週目は「『沖縄の朝』のあらすじつくりと教科書の閲覧」の編集作業に取り組んだ<sup>39)</sup>。「久しぶりのこの種の仕事」という岡崎の言葉から、文革前にもこのような編集作業を同様に行ったことが容易に推測できる。

### (3) 若手教師への指導

教材づくりと同じように、若手教師への指導も岡崎の重要な役目であった。方法としては、授業を参観し問題を発見したら事後に教師に伝えることから始まった。

ある日、岡崎は二年生の授業「口語」、すなわち朗読を中心とする授業を参観した。ノートには「ところどころ音が飛んでいる。(例) …」、「アクセントの癖」、「川崎、岩崎、長崎…さき、岡崎、山崎…ざき」など発音の間違いや、「『九時からで結構だそうです』一第 1 回は抜けたが、これは大事な助詞（意味がある）」、「少々お待ちください。ちょっと（×）団長に…」など文法や敬語のあやまりをメモした<sup>40)</sup>。

1973 年度、岡崎が自らつくった三年生用の「閲読」教材が導入された。この授業の方針は「題材の思想内容と言語現象を説明するほか、討論会、問答、翻訳、文法・文型の練習など口頭や文筆の練習も必要がある」とされた。徐昌華、張光珮、鄭敬堂、崔榮林が講義を担い、岡崎は授業準備の指導を担当した<sup>41)</sup>。そのため、岡崎は授業を参観し、「机を（→は）そのままにしておいてください」、「班長はこまごまと気をつけて（→気を配って）、面倒をみてくれた」、「『まあまあ』－『好了好了』から逆に考えてはいけない」、「『ツカツカと』は『大揺大擺』ではない」など間違いを記録した<sup>42)</sup>。

岡崎は授業参観を通して若手教師の日本語授業における不足点を把握することができ、「中堅教師の研修」を行うことを提案し、教師崔と打ち合わせを行った。「目的は研修を通じて、学生の作文、造句、報告ができる（高める）ように」であり、材料は「まずニュース映画の説明から始めて、今後いいものをみつけて豊富にする」こととした。時間は「毎週水曜」で、最初は「2 週間に一篇」で、「今週は 500 字位、個人でやって出しておく。つぎの週に添削報告をする。そのつぎの週に翻訳作業をやる。易しいものからむずかしいものへ。分量の『少』から『多』へ」と決めた<sup>43)</sup>。こうした打ち合わせを踏まえ、岡崎は「岡崎提案の計画案」を練り上げた。計画案には岡崎の様々な配慮が見られる。冒頭では「筆頭の中文日訳を主にするが、口頭練習も配慮する」と研修の目的を述べた。また、「各先生の力に基本的な差違があるとは思わないが、またそれぞれ特徴と弱点をもっており、わ

ずかながら開きがあるのも事実だと思う」と若手教師への敬意と配慮を払いながら冷静に各教師の「特徴」と「弱点」を見分けた。その結果、「場合によっては二つのグループに分かれてやることも考えられる。しかし、これをやるとしてもはじめの数回をいっしょにやった後、その実績にもとづいてわかる」と実力を把握した上でグループ分けという客観的な手法をとると述べた。さらに日本語の表現力が高い教師林への配慮をし、「林さんの長所と短所を見ると、むしろ中国語の表現力を強めることが緊急の重要な任務ではないかと思うし、教研室の期待するところも同じ方向ではないかと思うので、一応教研室の意向を聞いた上で考えたいと思う」と教研室の意向も充分考慮していた。計画案はまもなく実行に移された。「第1回の材料はみなさんに選んでもらう」。「協議の結果、決定したものは、…『外語教学電影資料』の中から」抜粋した内容で、教師崔と徐と史がそれぞれ担当した<sup>44)</sup>。

#### (4) 授業の担当

教材づくりと若手教師への指導のほか、岡崎は授業も担当した。ここでは、岡崎が1973年度に担当した「総合訓練」と「中文日訳」の2科目を事例として取り上げる。

「総合訓練」は労農班第三学年、つまり卒業年度の科目で、前期に配置された。担当した感想を「プロ文革以前の学生なら5年卒業時に一部の学生しかやれなかった実地通訳を全員がやってのけた。もちろん、まちがいを含めて不正確なところ整っていないところは少なくなかったが、曲がりなりにもやってのける力を身につけているということが重要だと思う」と学生の努力を評価した<sup>45)</sup>。一方、「教育革命の情勢は予想以上に進んでおり、教育工作者に課せられた任務は多く、また困難なように思われる」と教育革命への不信の気持ちをにじませた。そうした革命のただ中にいる自らを省みて、「北京日本語教研室が自分に期待している任務が果たせるかどうか、いささか自信を動揺させられている」と不安をも覗かせた。それでも、自らを奮い立たせるが如く「自分の力の限界を乗り越えて奮闘」すると決意を語った。短縮された教育期間の中で、一定の成果を上げねばならず教育者として苦しんだ姿が浮かぶ。結局、総合訓練の成績査定については議論を呼び、9月24日に会議が開かれた。教師張と李は採点の基準として「通訳としてどれだけ原文の趣旨を伝えることができるか」、「重大な文法的な誤りをどの程度に防げるか」、「語彙の誤りの程度」など結果論を評価の重点に置くことを提案した。これに対して岡崎は「今日までの進歩の程度、それに対する自覚の程度（自分の長所はもとより短所についても）を入れるべきだと思う。それは将来の能力の向上を見通す材料になると思うから」、「また、技術的な面では、文法的な誤りの問題だけでなく、流暢さの程度と基本的な語彙についての不正確な発音、とくに偏った発音のずれをどれだけ自覚し、矯正に努力し、効果をあげたか、を入れるべきではないか」と述べた<sup>46)</sup>。要するに結果論だけではなく、過程論すなわち総合訓練の過程において学ぶ側がどれほど自覚的に学んだのかも評価する必要があると強調した。学力が遙かに不足する学生を募集し、さらに3年の間に5年の教育課程をむりやり消化させる教育革命自体に岡崎は疑念を抱いた。こうした議論の結果「正確さ流暢さ（発音上の、または文法上の重大な誤りの多少も含めて）等表面にあらわれた要素だけでなく現場の処理能力、応用力などを考慮して点をつけ」ることとなった<sup>47)</sup>。

「中文日訳」は「総合訓練」と同じく卒業年度の科目であり、後期に配置された。授業

の内容に関する打ち合わせはすでに前期から行われた<sup>48)</sup>。それによって作成したのが「中文日訳課講義要綱（草案）」であった<sup>49)</sup>。目的は「今まで学んだ日本語の語彙，句型を総合的に活用する力を養い」，「翻訳技巧の基本を身につける」ことであり，「あわせて口頭の中文日訳の技能を整頓し強化する作用も狙うもの」であった。「到達の目標は『人民日報』の社説を日本語に翻訳して，その内容・趣旨を正確に伝え，表現上でも大きなまちがいや欠陥が出ないようにする」ということであった。学習時間について，1973年度後期の実質学習時間は「19週」であり，週ごとの学習時間数は「課内3時間，課外3時間」であった。「出題は隔週に1回」で，「翻訳作業は主に課外の時間を使い」，「講義・講評（11回）と口頭による翻訳練習（8回）」は課内の時間で行う。「翻訳材料は主として人民日報所載の社説，その他の政治論文，決議，メッセージ，ニュース，通信，報告文など」であった。「一回の作業の量は中国語（原文）で筆頭のばあいは400字から700字前後まで，口頭の場合は700字から1400字前後までの見込みで，難易度を考慮しながら少量からはじめて次第に量をふやして行く方針である。また口頭による翻訳の場合は，筆訳のように厳密な要求をせず，ある程度量をこなす訓練にもするつもりである」とした。「中文日訳（筆頭）の基本的な心構え」について，岡崎は「まずわが国の社会主義革命と社会主義建設の状況と中国人民の生活，思想，歴史，中国の対外政策を広範な日本人民に紹介し，宣伝するという大前提を忘れないようにする」こと，「原文を徹底的に把握する」こと，「より正確で自然な日本語の表現にする」こと，「事前の準備と日常の蓄積につとめる」ことの4点を提示した。「備考」欄では「講義・講評にも口頭翻訳にも学員の討論の機会を設ける」と述べ，授業に対する学生の積極性を高めようとの工夫もみられる。また，岡崎は「中国語と日本語とでは，文の構造はもとより，発想法から違うのだから，一つ一つの言葉を，中国語から日本語に置き換えるだけでは，正確で自然な日本語にはならない」と述べ，「読者である日本人の生活，風俗習慣と社会環境等に対する理解を深め広めておくこと」を強調した。

おわりに

本章は，岡崎の経歴を明らかにし，北京大学お雇い日本人教師としての岡崎の全容を，とりわけ教師としての岡崎，教材づくり，若手教師への指導，授業の担当という4つの側面から描き出した。岡崎は1953年5月，43歳の時に北京大学に就任した。文革の最中1969年12月に一時帰国を余儀なくさせられたが，1973年4月に北京大学の要請で再び赴任し，1988年9月79歳の誕生日を迎えるまで教壇に立ち続けた。在職年数は通算32年を超え，北京大学でもっとも長く日本語を教えていた「老専家」であった。

岡崎の退職を記念して日語学科（元の日語科）は座談会を開いた。出席者は在任中の全教師はもちろん，岡崎が着任した1953年当時の学科長劉振瀛も参加した。劉は座談会で岡崎の人となりや「敬事愛人」（事を敬い，人を愛す）と称賛した。

岡崎は家族人としても温かい人であった。日記には息子と娘のことはもちろん，孫の初訪中についても詳細な記録を残した<sup>50)</sup>。孫が見たいと言っているところをすべて記録し，詳細な計画を立てて王府井，古代天文台，友誼商店，歴史博物館，天壇，故宮，北京ダック飼育場，工場見学，家庭訪問，果樹園見学，映画鑑賞，雍和宮，十三陵，雑技鑑賞，香山，自然博物館など北京をまるごと案内した。孫に中国のことを知ってもらいたかったか

らに違いない。

岡崎の社会活動は 20 世紀日中関係の縮図でもあった。晩年の岡崎は日本中国友好協会に勤務する長男温と連携して両国の架け橋となった。日本の国語教師を中国各地の大学へ推薦したり、留学生の派遣、姉妹校締結の斡旋、豊橋市地下資料館から北京地質博物館に対する標本提供要請の仲介など様々な活動を展開した<sup>51)</sup>。

岡崎の活動は中国で高く評価された。在任中の 1986 年 12 月、岡崎は 18 番目の外国人として「永久居留資格」が与えられ、中国の永遠の友として受け入れられた。退職した翌 1989 年 9 月 1 日、岡崎の功績を称えるため、当時の総理大臣李鵬は中国政府を代表して岡崎に特別な「榮譽証書」を授与した。岡崎の死に中国は盛大な葬儀を行った。葬儀委員会を立ち上げ、北京の八宝山革命公墓で告別式を行った。委員長を教育部部長陳至立（日本の文部科学省大臣に相当）、副委員長を国家外国專家局局長万学遠と北京大学学長陳佳洱が担った。委員 12 名中には教え子の外交部部長唐家璇（日本の外務大臣に相当）と前駐日大使・全国人大外事委員会副主任徐敦信らがいた。また谷野作太郎駐中国大使はじめ北京在住の日本人も数多く参列した。

岡崎の死後、長男温は父の遺志を継承し、父が残した図書や雑誌、貯金をすべて大学に寄付した。図書と雑誌は大学や学部の図書館および学科の資料室に保管されて、貯金は岡崎兼吉基金として北京大学基金会に運営されている。

本章は資料の制限で岡崎の人生の一部しか取り上げることができない。1972 年以前の日記については岡崎本人が晩年の日記にその存在を記しており、また遺族も目にしたことがあると証言している。今後は引き続き資料を発掘し、岡崎の北京大学での教育的活動を一層明らかにしたい。

---

1) 孫宗光氏から頂いた「北京大学日本語文学科卒業生名簿（1949-1996）」。

2) 1933 年に植民地台湾で生まれた。父・林水永の貿易関係で 1940 年に一家は神戸へ移住した。中華同文学校、神戸市立湊川高校を経て、1952 年に中国大陸に渡り、北京大学に進学した。1953 年、北京を訪れた父（当時、神戸華僑総会副会長）の紹介で廖承志と出会い、廖の抜擢で対日工作の隊列に加わった。

3) 1930 年に河北省で生まれた。1953 年に北京大学の「東方語言文学系日語專業」を卒業した。1952 年、新中国最初の日本からの賓客が北京大学を見学する際、北京大学を代表して流暢な日本語で案内したことで、賓客の供をしていた孫平化に見出された。孫は直ちに廖承志に推薦し、以降、対日工作の隊列に加わった。

4) 1938 年に江蘇省で生まれた。1955 年から上海にある復旦大学の「外文系英語專業」で学んでいたが、対日重視政策で日本語を勧められ、1958 年に北京大学の「東方語言文学系日語專業」に転学し、1962 年に卒業した。

5) 小池晴子『中国に生きた外国人 不思議ホテル北京友誼賓館』径書房、2009 年、122-123 頁。

6) 岡崎兼吉「ノート」。

- 7) 政界往来社編集部勤務していた途中、1度東京都にある財団法人社会教育協会編集部に移ったが、約1年半勤務の後、再び政界往来社編集部に戻った。
- 8) 「恩師囲んで同窓会」『朝日新聞』広島版、1981年8月2日。また、この記事によると、この中学校は中国人民鉄道に勤める日本人の子弟(13-19歳)ら157人が学んだが、1953年3月から残留者の集団帰国が始まり、卒業者を出さないまま廃校になった。
- 9) 「邦人居留民の帰国援助問題に関する日本赤十字社等と中国紅十字会との申し合わせ 1953,3,5」, 外務省アジア局中国課監修『日中関係基本資料集 1949年ー1969年』霞山会、1970年、48-49頁、資料15。
- 10) 残留日本人送還の支援について、水谷尚子『「反日」以前 中国対日工作者たちの回想』(文芸春秋、2006年、94-96頁)参照。
- 11) 「中日国交断絶期の日本語高等教育機関ー建国初期の2校を対象として」『中京女子大学研究紀要』第44号、41-51頁。
- 12) 大西春秋が逮捕された年月や罪名は、天理大学の法人の人事の記録によるものである。また、平林美鶴(『北京の嵐に生きる』悠思社、1991年12月、178頁)によると、大西春秋は1954年に国外追放となり帰国した。
- 13) 伏見和郎『科学技術者のみだ文革前後の北京大学』日中出版、1980年9月、147頁と193-194頁。
- 14) 前出平林美鶴『北京の嵐に生きる』、84頁。
- 15) 前出伏見和郎『科学技術者のみだ文革前後の北京大学』、205-206頁。
- 16) 岡崎兼吉「手帳」(1972年)による。講座の期間は9月20日から11月22日までの毎週水曜日 10:00-12:00(初回のみ 11:00-12:00)で、内容は「文革はなぜ起きたか」など政治問題から「解放前から解放後まで家庭における婦人の地位」など婦人問題まで幅広いものであった。
- 17) 前出平林美鶴『北京の嵐に生きる』、109-110頁。
- 18) ウーヴェ・リヒター著、渡部貞昭訳『北京大学の文化大革命』岩波書店、1993年7月、116-117頁。
- 19) 当時の北京大学には、日本語教師として1956年に赴任してきた鈴木重歳と児玉綾子夫婦がいた。1972年、鈴木重歳が回復のみこみがない重病で入院した。鈴木のかわりに北京大学は急いで岡崎を要請した。ちなみに、鈴木重歳は河上肇の婿である。
- 20) 親書には「公証書」が付いていた。
- 21) 岡崎兼吉「日記」(1973年4月)によると、24日に香港着、25日に列車で深圳に入り広州へ移動、広州空港から北京空港へ飛んだ。中国国家外国専門家局と北京大学の代表の出迎えを受け、友誼賓館に着いたのはすでに午後11時半を過ぎていた。
- 22) 岡崎兼吉「日記」、1973年4月29日。
- 23) 江東「岡崎兼吉先生」、孫東民主編『永遠の隣人 人民日報に見る日本人』日本僑報社、2002年、561-563頁。また、引用文中、教材と教学メモが多数残っていると書かれているが、現在のところ、所在が確認できない。
- 24) 李宗恵、中国人民大学教授、中国駐大阪総領事館領事などを歴任した。2009年8月19日午後、元中国高等教育出版社編集審定者尹学義の紹介で北京望京の自宅でインタビュー

一に応じた。顧海根，元北京大学日語科教授，2009年8月16日午前，大有北里の自宅でインタビューに応じた。

- 25) 岡崎兼吉「劉振瀛先生の思い出－劉振瀛先生誕生八十周年記念会で挨拶」「日記ノートX'95.7.13～'95.10.17」。
- 26) 岡崎兼吉「岡崎挨拶」「日記」，1988年9月22日。
- 27) 岡崎兼吉「6月1日午後3:30～ 卞さんとの打合わせ」「業務雑記帳（一）」。
- 28) 岡崎兼吉「日語專業學員花名冊 1972年2月」「業務雑記帳（一）」。
- 29) 岡崎兼吉「三年級課程時間分配表及幾点説明」「業務雑記帳（一）」。
- 30) 岡崎兼吉「日語專業三年級教学改革方案」「業務雑記帳（一）」。
- 31) 同上。
- 32) 岡崎兼吉「ノート '73 5/4-'73 12/29」。
- 33) 岡崎兼吉「日記」，1973年5月14日と5月18日。
- 34) 岡崎兼吉「5月18日（金）午前8:30～ 三年の教材」「業務雑記帳（一）」。
- 35) 「灰色の月」は志賀直哉が1945年10月16日に東京から渋谷までの山手線の車中で餓死寸前の少年と隣り合わせた経験を書き，廢墟と化した敗戦直後の日本の現実を鮮明に描き出した短編である。「遙拝隊長」は井伏鱒二が太平洋戦争に従軍し頭部に負傷した元陸軍中尉岡崎悠一の異常な言動を伴う敗戦に至るまでの村内における騒動を描くもので，戦争と戦争思想の愚劣さを痛烈に暴き，嘲笑した小説である。「藤野先生」は魯迅の名作である。「北京の旅」は孫宗光の回顧によると『人民中国』に掲載されたものらしい。
- 36) 岡崎兼吉「三年の教材，追加候補作品について」「業務雑記帳（一）」。
- 37) 岡崎兼吉「5月18日（金）午前8:30～ 三年の教材」「業務雑記帳（一）」。
- 38) 岡崎兼吉「日記」，1973年5月19日。
- 39) 岡崎兼吉「日記」，1973年5月21日。
- 40) 岡崎兼吉「5月29日 二年生口語見学」「業務雑記帳（一）」。
- 41) 岡崎兼吉「日語專業三年級教学改革方案」「業務雑記帳（一）」。
- 42) 岡崎兼吉「3月15日（金）午前8:00～ 三年參觀」「業務雑記帳（一）」。
- 43) 岡崎兼吉「9月1日午前10:00-11:10 “中堅教師の研修”の打合わせ」「業務雑記帳（一）」。
- 44) 岡崎兼吉「岡崎提案の計画案」「業務雑記帳（一）」。
- 45) 岡崎兼吉「11月<sup>マ</sup>日（木）午後3:00～5:30 周培源氏の接見のときの発言－教育革命をめぐる感想」「日記ノート1973,9,11～1974,4,2」。
- 46) 岡崎兼吉「9/24 メモ 労農班総合訓練の試験成績査定などについて」「業務雑記帳（一）」。
- 47) 岡崎兼吉「旧三年労農班の成績査定のやり直しをめぐるって」「業務雑記帳（一）」。
- 48) 「11月7日（水）午後2:30～4:30 中文日訳課のための打合わせ－崔先生と日語專家室で」と「11月16日中文日訳打合わせ」，いずれも岡崎兼吉「業務関係ノート（二）」。
- 49) 岡崎兼吉「中文日訳課講義要綱（草案）」「業務関係ノート（二）」。

50)岡崎兼吉「日記」, 1983年7月3日～8月17日.

51)岡崎兼吉「1979.8.7～ ノート」と「1979～1983」参照.